

# 子どもは ことばをどう記憶するのか

武村 昌 於

近年、心理学や大脳生理学において記憶に関する知的・心的構造が漸次明らかにされつつある。そしてそれに呼応するように幼児期の言語学習に関する手引き書や学習書が、巷に氾乱するようになった。まるで、その学習書通りに学習すれば、子供の持つ語彙が拡充され、豊かに自己表現できる子供が育つと錯覚しそうになる。

ところが、子供がことばを獲得したり、語彙を拡充したりする知的・心的構造というのは、未だに殆んど解明されてはいない。そういった子供の言語生態が明らかにされていないのに、子供の実態に即した言語指導がなされるはずがない。こういった点については我々は日々の教育実践の反省の中から、もっと深く思い至るべきであろう。特に学習指導要領が改訂され、表現・理解・言語指導事項とに分けて指導されようとするこの期に当たって、一体子供の知的・心的構造の何をもって言語指導とするのか、そこに大きな省察が加えられなければならないであろう。

さて、子供がことばをどう習得しているかを考えてみると、覚えようとして覚えたことばは少ないはずである。ことばは、人間の精神活動に付与されていくものであり、あることばに当てはまる精神活動がなされていない限り、それは子供のことばとして定着しはしない。従って子供の精神活動がなされている場合には、常にそれ

を表現することばが付随していくわけであるから、特に覚えようとしなくても、ことばは習得されているわけである。

しかし、学年が進むにつれて、意図的にことばを記憶しようとする活動もなされていることは確かである。そこで、子供はことばを記憶する際、記憶という精神的・知的活動をどこまで用具として扱うことができるか、を明らかにしたいと考えた。そのことを子供がことばをどう記憶するか、という実体を明確にすることによって考察していこうとするのが本稿である。

## 一、問題文と調査のねらい・方法

調査Ⅰ 次のことばの意味をよくわかるまで読み、見ないで言えるように、ことばを覚えなさい。(あとでテストします)

ことば 意味

○うてはびびく——すぐに、こたえがはね返ってくる。

○くぎをさす——約束をまちがえないように、念をおして言う。

○げたをあずける——うまくやってくれるように人にまかせてしまう。

○心ゆくばかり——思うぞんぶんにする。

○たきつける——人をけしかける。

○ぼうにふる——今までの努力をむだにする。

○目が黒い——生きていること。

○手をつける——仕事にとりかかる  
○二の足をふむ——しりごみする。  
○まゆを開く——心配がなくなつて、うれしくなる。

(答) 次の文の意味に合ったことばを思い出して、線の下に書きなさい。

まちがつてもよいから、少しでも覚えておくことを書きなさい。

○人をけしかける

○しりごみする

○思うぞんぶんにする

○うまくやってくれるように、人にまかせてしまう

○心配がなくなつて、うれしくなる

○約束をまちがえないように、念をおして言う

○生きていること

○すぐに、こたえがはね返ってくる

○仕事にとりかかる

○今までの努力をむだにする

調査Ⅱ 次のことばを覚えなさい

○しのぎをけずる

○手をこまねく

○えりを正す

○色に出る

○つめに火をともし

○うだつが上がらない

○たががゆるむ

○手ぐすねをひく

○ 気をのまれる  
○ 酒にのまれる

(答) 覚えていることばを書きなさい。

一部分だけでもよい。順序が変わってもよい。

調査Ⅲ 上の花ことばと下の花の名前を覚えなさい。

えなさい。

○ 活発 ——— ナノハナ

○ 思い出 ——— スミレ

○ 気どり ——— アサガオ

○ あこがれ ——— ヒマワリ

○ 上品 ——— キク

○ 愛 ——— コスモス

○ 希望 ——— サクラソウ

○ 内気 ——— シクラメン

○ 清らか ——— スイレン

○ 幸運 ——— クローバー

(答) 上の花の名前に合う花ことばを書きなさい。

○ キク ———

○ クローバー ———

(以下略)

(調査対象) 調査Ⅰ

三年生

担当責任者 校名

山本孝子 神奈川 広畑小 三六名

四年生

下鳥照子 東京 町田南四小 三八名

五年生 (調査Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)

武村昌於 東京 玉川学園小 三七名  
六年生  
小泉節子 東京 町田第三小 三七名

(調査期間)

五十二年六月～七月

(調査のねらい)

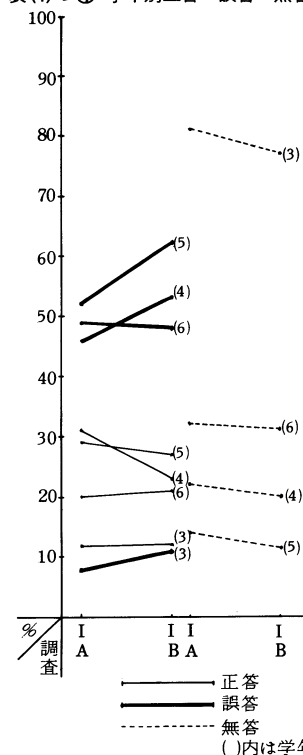
調査Ⅰは慣用句とその意味とを照合させながら、慣用句がいかに記憶されるかを、見ようとするものである。調査に使用する慣用句の選定は、子供にとってまだ定着されていないと思われるもの、イメージを描きやすいもの(あるいは、動作化しやすい)体の部位名を伴うもの、とした。

調査Ⅱの慣用句の選定はⅠと同じだが、Ⅰと異なって慣用句の意味と照応させるのではなく、慣用句そのものを記憶させ、それがⅠの場合とどう異なるかを見るためのものである。更にその記憶のしかたと調査Ⅲの花と花ことばという無意味に対応したことばの記憶のしかたとどう異なるかも見ようとするのである。

(調査の方法)

調査Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ共、慣用句や花ことばを覚える時間は五分間とし、その後すぐ解答用紙に記入させる。ただ調査Ⅰの方は、一回目には記憶・再生させるが、次の日には記憶する作業をせずに、再生のみさせた。従って調査Ⅰは記憶・再生のもの(ⅠA)と再生のみのもの(ⅠB)と二回行ったことになる。

表(1)の① 学年別正答・誤答・無答率



## 二、調査の結果と考察

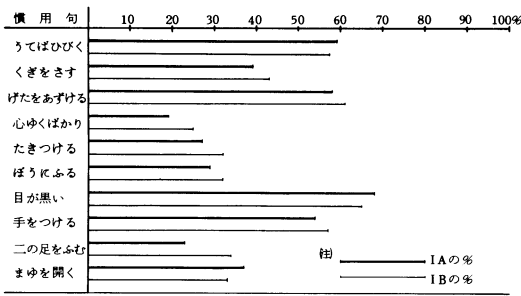
まず慣用句の調査のⅠAとⅠBの結果

(表(1)の①) から見てみよう。正答率で見ると、三年生が極めて低く、四年生、五年生で率が高いが、六年生でやや落ちこむというのが面白い。所が誤答率を見ると、四・五年生より六年生の方が低く、その分だけ無答率が高いことがわかる。しかしもっと巨視的な見方をすれば、正答率で見ると四・五・六年生は凡そ同じ傾向にあり、三年生だけが極めて低い、ということになる。つまり慣用句のようなことばの面の記憶に関する限りに於いては、三年生と四年生の間に著しい変化があり、又四・五・六年生では余り変化がない、言い換えれば、四年生で獲得された、ことばの記憶の様式は五・六年生になっても変わらないということになる。(結果Ⅰ)

表(1)の② I AとI Bの正答率

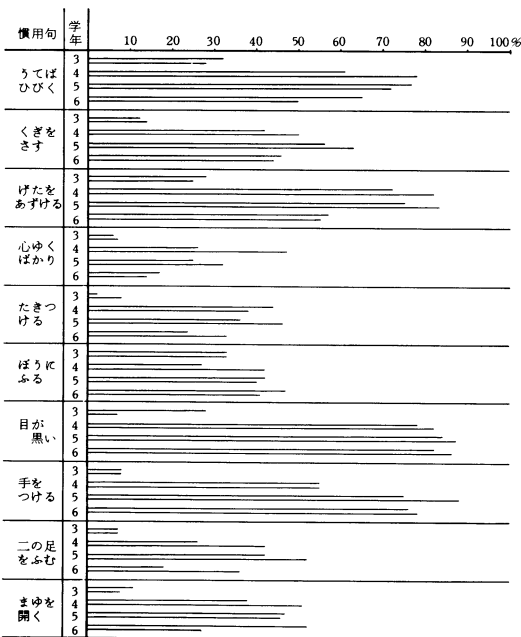
	I Aに比べてI Bが	I Aに比べてI Bが	I Aに比べてI Bが
3年	上がった者 (33%)	同じ者 (56%)	下がった者 (11%)
4年	上がった者 (61%)	同じ者 (21%)	下がった者 (18%)
5年	上がった者 (51%)	同じ者 (20%)	下がった者 (29%)
6年	上がった者 (33%)	同じ者 (28%)	下がった者 (39%)

表(2)の①慣用句別正答(4学年合計の平均値)



較してみよう。正答率の比較で見ると、六年生では横ばいだが、三・四・五年生では僅かながら、上昇している。このことは大変注目し得る結果であるといえる。それは、誤答率を見ると、各学年共横ばいか、或いは減少しており、無答率も各学年共やや減少していることから、ことばの記憶というのは、記憶した直後より一日経過した方が、わずかだがより正確に再生する、ということを示しているからである。裏返せば記憶した直後は、ことばとしてまだ不安定な状態にあり、頭の中でよくこなれていないことを示している。(結果2)そのことは表(1)の②でも裏付けられる。I Aの正答率よりI Bの正答率の方が上がった者は、下がった者に比べて三・四年生で三倍、五年生で二倍、五年生では同率という結果で

表(2)の②慣用句別正答率(各学年の平均値)



注 各学年2本の線は、上がI Aの%, 下がI Bの%

ある。従ってことばの記憶は、記憶直後より、一日経過した方がより正確なのである。又、このことは、子供はことばを、少なくとも記憶術の方法では覚えていない、と言える。

次に慣用句そのものに視点を置いて分析、検討してみたい。

調査Iで使った慣用句は、前述したように、子供にとってイメージの描き易い、又動作化し易いものである。つまり人間の身体の状態や動作を直接表現している句を選んでいのである。従ってここでいう記憶することばは、ことわざのように、喩えをもつて何かの「こと」を表わすものではない。このように考え、慣用句を選択したということとは、換言すれば、子供がこのようなことばを記憶するのは、その句に何か

のイメージを伴わせることによってである、と仮定したことになる。それに対して結果はどうであったか。

まず表(2)の①を見ると、慣用句で正答率の高い句(うてばひびく・げたをあずける・目が黒い・手をつける)のグループと、中間の句(くぎをさす・まゆを開く)のグループと、低い句(心ゆくばかり・たきつける・ぼうにふる・二の足をふむ)のグループとに大別される。正答率の高い句は、人間の動作や状態をそのまま表現した直接表現の句であり、いわば最もイメージの描き易い句である。又それらの句についての誤答例を見ると、「うてばひびく」「げたをあずける」「目が黒い」の三句は、それらの句と意味の上から隣り合った句と間違えるとか、それらの句に対するイメー

ジが変化してしまつて全く異なったことばを出してくる、というのが少ない。所が「手をつける」は、「手にふれる」「手にかかる」「手を出す」といった具合に、意味の上から隣り合った句と混同している。それは「手をつける」イメージが、ことばから離れてしまつていことを示している。

中間の正答率の慣用句では、例えば「くぎをさす」は、くぎをさす行為そのものの意味を転化させている転注の句であり、いわば、子供自ら句に対するイメージを初発のイメージから変容させなければならぬ句である。従って誤答例では、イメージを転化させるために「くぎをさす」が「くぎをうつ」「くぎをふむ」といった、意味の上からは全く異なったことばが多くなるのである。

正答率の低い句は、転注の要素に加えて「感情」という要素が加わっているために、誤答例では、「心ゆくばかり」が「心ゆくままに」「心にまかせる」に、「たきつける」が、「あせらせる」に、「ぼうにふる」が「むだにする」「うでをふる」「手をふる」に、「二の足をふむ」が「すぐ下がる」「うしろへさがる」「二つ目の足」といったように全くイメージや意味が変わつてしまふ傾向が強い。このような誤答は、慣用句に対するイメージの変容による間違ばかりでなく、調査に使われた慣用句の意味の説明のしかたによつても異なつてく

表(4) 調査Ⅱ (数字は%)

	正答	誤答	無答	誤答例 (記憶)(再生) ( )内は人数
しのぎを けす	53	31	16	しけずる(1)、のぎをけずる(1)、しのぎを(1)、けずる(1)、つねにけずる(1) しの(1)、しのびをけずる(1)、しけはけずる(1)、つ(1)、す(1)、し(1)
手を こまねく	31	36	33	手をよび(1)、手(4)、手ですくう物(1)、手をまねく(1)、まねく(1)、手に(2)、 てを(1)、手をまねく(1)、手のこまをまねく(1)
えりを 正す	64	8	28	色を正す(1)、えりをなおす(1)、正す(1)
色に 出る	53	36	11	色を出す(3)、色が出る(4)、色を出す(1)、色を出る(1)、色に出す(4)
つめに 火をとす	58	28	14	火をとす(1)、つめたい火にあたる(1)、つめに火をとす(1)、火(1)、つめに火を(1) ひをとす(1)、つめに火がもえる(1)、つめを火でとす(1)、つめに火をつける(2)
うだつが 上がる	25	35	40	うだたに上らない(1)、うだつが上る(2)、うづは上らない(1)、う(2)、うかがつく(1)、 うづぎの上にある(1)、うわが上らない(1)、うだだに上らない(1)、うだ(1)、うだつが(1)
たがが ゆるむ	16	40	44	てがかゆるむ(1)、たがが上らない(2)、たががでる(2)、たが(1)、たがが(2)、 たがが(1)、たががゆるめる(1)、たがが上らない(1)、たがが上る(1)、ただ(1)
てくすねを ひく	25	28	47	てをよび(1)、てまねきをする(1)、すねをつける(1)、たががひく(1)、てに(1)、 ひく(1)、てが(1)、気くすねをひく(1)、たがねをひく(1)
気を まされる	78	19	3	気にかまれる(5)、気がまされる(1)、気をます(1)
蔭に まされる	92	8	0	さけをのむ(1)、さけをのまれる(1)、さけをのます(1)

表(5) 調査Ⅲ (数字は%)

花 ことば	正答	誤答	無答	誤答例 (記憶)(再生) ( )内は人数
(キタ)上品	97	3	0	思い出(1)
(クローバー)幸運	86	3	11	幸運(1)
(コスモス)愛	94	0	6	
(スイレン)清らか	46	20	34	思い出(2)、希望(2)、き(1)、活発(2)
(スマイル)思い出	71	9	20	活発(1)、気どり(1)、希望(1)
(シクラメン)内気	71	6	23	希望(1)、清らか(1)
(サクラソウ)希望	63	14	23	気どり(1)、内気(2)、清らか(1)、愛(1)
(ナノハナ)活発	83	11	6	内気(1)、気どり(1)、清らか(1)、こんき(1)
(ヒマワリ)あこがれ	66	20	14	気どり(5)、思い出(2)
(アサガオ)気どり	57	20	23	あこがれ(6)、思い出(1)

表(3)

調査ⅠⅡⅢ 5年生の個人別正答表

番号	慣用句を知 っていた数		正 答 数			
	I	II	I A	I B	II A	II B
1	2	1	9	8	5	4
2	2	0	7	9	6	8
3	4	1	7	8	6	8
4	2	0	4	5	4	5
5	0	0	10	10	8	10
6	6	5	10	10	9	5
7	0	0	5	5	4	7
8	2	0	7	7	4	8
9	2	0	8	9	6	5
10	0	0	7	7	6	7
11	1	0	6	5	2	6
12	1	0	2	4	2	9
13	2	0	6	5	3	9
14	2	0	4	3	4	3
15	2	0	8	9	8	10
16	0	0	3	4	3	5
17	2	0	5	6	3	6
18	0	0	3	6	2	8
19	1	0	4	6	4	5
20	0	0	8	8	10	10
21	2	0	8	8	8	10
22	2	0	5	6	6	4
23	1	0	8	9	7	9
24	0	0	6	3	4	9
25	2	0	1	1	3	7
26	0	0	4	6	4	10
27	0	0	5	4	1	6
28	0	1	3	6	8	9
29	0	0	10	9	10	10
30	0	0	6	7	3	5
31	1	0	4	4	6	7
32	0	2	2	2	2	2
33	0	0	4	6	4	10
34	0	0	3	4	3	9
35	0	0	5	3	1	5
36	4	0	9	7	7	10
37	2	0	4	7	6	7

るのではないかと考えられる。例えば「心ゆくばかり」が「心ゆくまでする」「心にまかせると変わったのは、意味が「思うぞんぶんにする」とあるためであらうし、「二の足をふむ」が「すぐにさがる」「うしろへさがる」に変化するのには、意味が「しりごみする」とあるために、その方に捉われて、イメージと句とが分離したために間違えたと考えられる。

さて前に戻って、正答率の低いグループの句は、四つともⅠAに比べてⅠBの方が率が良い。特に「二の足をふむ」の句の伸びは大きい。それに比べて正答率の高いグループの「うてばひびく」や「目が黒い」「まゆを開く」などは率が下がっている。このことを各学年別に見てみよう。(表②)の②正答率の低いグループの句は、それぞれ同じ傾向(各学年共少しずつ伸びている)を示しているが、概して四年生の伸び率が大きい。このことは、四年生が人間の感情面を操作することに興味をもっている。又はいじくりたがる傾向があるが、五・六年生になると、そういったことが抑制されてくる、ということを示している。その他の句に関しては、四年生はまちまちである。所が、「うてばひびく」は、四年生では伸び、他の学年では下がっている。又「目が黒い」は三年生でぐんと下がっている。この二つの例について、誤答例を上げながら検討を加えてみよう。

まず「うてばひびく」では、五年生は、「うてばうなる」「うてばはねる」「うてば返る」「たたけばひびく」、六年生は、「ひけばもどってくる」「いえばかえる」「あてかえる」などとなる。四年生では、他のことばとの混同が多いのに対して、五・六年生では、ことばそのものに捉われずに、ことばの持つイメージをたぐり寄せて、それに何とか、ことばを付与しようとする傾向が見られる。つまり四年生は、ことばそのものに引きずられて、そのことばがストリートに頭に入るが、五・六年生では、ことばからくる印象や感覚が記憶されて、それに対してことばを自由に付与するようになる。更に言えば、四年生では、融通は利かないが丸暗記は得意であり、五・六年生になると、ことばに対して、何かしら自分なりに納得のいく意味づけをしないと暗記することができない傾向が強くなる、と言える。(結果5)

次に「目が黒い」で三年生は、無答率が61%から86%に増加する。三年生は、他の句でも無答率が多いのだが、この句は特に差が大きい。恐らく三年生の頭の中には、「目が黒い」―「生きていること」と途中に何も介在させずにストリートに入ったのであろう。しかし「生きていること」に対応する慣用句は何であったか、と問われると、それを思い出す手掛かりとなる仲介物がないので、思い出せない、ということ

あろう。従って結果5との関連から考えると、四年生はことばをストリートに頭に入れるが、それでも何かしら、手掛かりをもって覚えようとするが、三年生では、それすら持っていない、と言える。(結果6)

以上が、慣用句をその意味と対応させた上で記憶したもの、の結果と考察であるが、意味を対応させないで、慣用句を記憶した場合はどうなるかを考察したい。このテストは、今まで慣用句とその意味とを対応しながら覚える、としてきたが、実は慣用句の「意味」ではなく、ただ慣用句を「言い換え」ているにすぎないのではないか、従って「言い換え」と対応させなければならぬから、却ってそれが邪魔になり、記憶できない子供もいるのではないか、といった考えからできたものである。今五年生の例を上げて表(3)について考察してみよう。

(表(4)・(5)も併せて参照)

正答数の合計を見ると、I Aが57%、IIが49%で、「意味」又は「言い換え」と対応させた方が、正答率が高い。又個人別に見ても、一ないし二個ずつIIの方が低くなっている。更に個人別に正答する状況を見ても、I Aで成績の良い者はIIでも良く、反対にI Aで悪い者はIIでも悪い傾向にある。従って五年生の全体的傾向としては、「意味」又は「言い換え」といった記憶する手掛かりを必要としている、と言える。

(結果7)

しかし、問題は、その二つの差の大きい子供である。下がっているNo 1、11、27、35の子供と、上がっているNo 5、28、31、37の子供の場合である。ここで、もう一つの調査IIIと対比して考えてみたい。調査IIIは花ことばの記憶であるが、慣用句の記憶のように、句と「意味」又は「言い換え」を対応させて覚えるのでなく、無意味なことばと対応させて、いかにして覚えるかを見るものである。

さて、前述のI Aに比べIIの方が下がった子供のうち、11、27、35の子供は同じ傾向を示している。つまりI Aで普通、IIで悪く、IIIで普通となる。この子供達の慣用句の覚え方(調査の後で、どのように記憶したかを紙に書かせたもの)は、例えば、「目が黒い」から「生きている」んだ、と理由づけを必ずして覚えていることが、共通している。従って理由づけのできない慣用句の記憶は下がり、花ことばは何らかの理由づけをして覚えたことになる。所がNo 1の子供の慣用句の覚え方は、「意味をよく読んで、ことばをおぼえた」とある。つまり、慣用句よりも「意味」そのものに引きずられた感がある。従って「意味」の無いIIやIIIの正答率が低かったのである。

次に、I Aに比べIIの方が上がったNo 25、28、31、37の子供は皆、IIIでも同じように成績が良い。No 25の子供の慣用句の覚え方は「最初ことばを何回も読んで意味をおぼ

え、そして最後に、頭の中がごちゃにな

ってしまふ」であり、No 28の子供は、「ことばをかくして、意味だけで読んだり」したのであり、No 31の子供は、「言葉とてらし合わせて、後から意味だけ見て覚えた」のであり、No 37の子供は、例えば「目が黒い」は、「日本人」として覚えようとしているのである。この子供たちに共通していることは、慣用句と意味を対応させようとしているが、実は「意味」や「言い換え」で覚えようとしているのでなく、何かもつと他のものと対応させているのである。そして常に自分の頭の中にある何物かと対応させて覚える技術を持っているので(いわゆる記憶術)、花ことばがよく覚えられるのだと思われる。従って以上に上げた子供たちは、いずれにしても、ことばを「意味」や「理由」又は自分の頭の中にある何物かと対応させて覚えようとしているのでありそれらが記憶の妨げになって覚えられないのではないことになる。

ここで、調査Iで正答率の高かった子供達の覚え方を見ると、「意味を自分で考えた」「さっと覚えた」「目が黒い、は文章を読んだだけで覚えた」「上のことばにあてはまる感じで覚えた」とある。つまりこの子供たちの方が、書かれている意味にこだわらず、自分なりに「言い換え」たり、理由づけをしなくて覚えているのである。反対に正答率の低い者ほど、意味づけや理由づ

けを必要とするのである。(結果8)

以上の表(3)に関する結果を総括すると、能力面で下の段階から特性を上げると、まず、ことばを記憶するには、そのことばと(意味においては無関係な)何かとを対応させる段階があり、次に、何かの理由づけをして覚えようとする段階、次に、何かと対応させるのが書いてある意味にこだわってしまふ段階、そして意味を自分なりに「言い換え」て難なく覚えてしまふ段階、といった順になる。(結果9)

以上9の結果までを総合すると、ことばに関する意図的な記憶のしかたと傾向は、次のようになる。

○三年生では記憶する手掛かりを、まだ持っていない。

○四年生で獲得されたことばの記憶の様式は、五・六年生になっても変わらない。(つまり何かを手掛かりに覚えようとする)

○四年生は、ことばがそのまま頭の中にストリートに入るが(何か一つの手掛かりを必要とする)五・六年生では何かしら納得のいく意味づけや理由づけが必要なこと。

○しかし五年生では、能力の低い者ほど、理由づけや意味づけを必要とし、能力の高い者ほど、それらを必要とせず、意味にさはどこかわらずに覚えることができる。(東京・玉川学園小・教諭)